

学習集団の中で育つ子どもたち

— 互いに思いを語り合える学習集団づくり —

男山佳子*

子どもたちをどう育てるか。学級集団づくりを進め、どの子どもも自分の考えを気兼ねなく言える仲間の中で、一人一人が成長してほしい、確かな学力と人間力をもとに生きる力を身につけてほしいと願わない教師はいない。この願いの実現のためには、学校教育の中で子どもたちが最も多くの時間を過ごす授業をどう創るかが重要である。子どもたち一人一人が学級の仲間とのつながりを深めながら、自己実現を果たし、視野を広げて成長するような授業の創造は、教師主導ではなく、学習集団として子どもたち自らが教科、教材に立ち向かう姿勢と意欲にかかっていると一言で過言ではない。本稿は、これまでの私自身の実践や参観した授業から、学習集団づくりをどのように進めたかをふり返って検討し、実践の方法と課題を明らかにすることを目的とした。

窓口として国語科、文学の授業を取り上げ、学習集団づくりの中で子どもが見せた姿から検証したい。

キーワード：学級集団づくり、学習集団 学習班（小集団）、文学教材、集団思考

1. はじめに

学校教育の大きな責務の一つは、子どもたちに学力をつけることである。一人一人に、基礎・基本の力を身につけさせ、確かな学力をつけるにはどうしたらいいのだろうか。子どもたちが互いに理解を深めながら豊かに学び合うためにどう育てていくのか。

さまざまに試行、実践されているが、同年齢集団で学習することを考えると、効果的な方法として学習集団を組織することが挙げられる。ことに、子どもたちの現状が、人間関係の希薄化と言われて久しく、人とうまくコミュニケーションがとれない、人間関係を築けない、協調性や社会性に乏しい等々、課題が山積している中では、個を育てる集団づくりは欠かせない。

私は、過去38年間、初等教育に携わった。その中で、授業においては、一見、まとまっているように見える学級であっても、無気力な子ども、基礎学力が定着していない子ども、授業についていけない子ども、みんなの中で発言できない子どもなど、個が生かされず埋没している場合があった。また、自己中心的な子ども、ふざける子ども、多動傾向の子ども、おしゃべりが多く集中しない子どもなどで授業が成立しない学級もあった。その一方では、指導者の発問により子どもたちの話し合いが進み、深まっていく実践もある。いずれの場合においても、学習集団として高めることにより、さらに子どもたちは伸びていくと考える。

そこで、自らの実践を振り返りながら、学習集団とし

てどのようにして育てたか、またどのように育てたらよいか、道筋と課題を検討したいと考える。

2. 文学教材に取り組む学習集団づくり

団地の大規模小学校に赴任して2年目、教育委員会指定の研究推進校となった。研究のテーマは、『「ひとりひとりを生かし考え合う学習集団づくり」—全員参加による文学の授業をめざして—』¹⁾であった。

開校当初18学級の予定が、ふたを開けるとすでに21学級になっていたという状況の中、私の担任していた3年生も4月当初3クラスであったが、9月から4クラスに編制替えになるほどの転入ラッシュだった。どの学年学級にも、学期途中で転入生があり、学級づくりは困難を極めた。しかし、だからこそ、集団づくりと授業づくりを車の両輪にして進める必要があり、前述の研究テーマとなったのである。

一人一人を生かす、という観点からは、読みの不十分さや表現力の不足はあってもどの子も参加しやすい文学教材のよさを再認識した。目立たないおとなしい子どもが活躍したり、問題を抱えた子どもが他の子どもの思いもつかない発言をしたりという活躍の場面が見られた。

その頃、私たちのめざしていた学級づくりは、「子どもたちに、学習への希望を与え、自分から進んで学んだり、生活することができ、子どもたちひとりひとりに自分を成長させてくれる学級であることを感得させ、明日を生きる喜びをもたせるところでなくてはならない」¹⁾というものであった。

* 三重大学教育学部附属教育実践総合センター

この学級づくりをもとに、学習集団づくりを進めてきた。その主な柱が以下の3点である。

- (1) 全員参加の学習規律の確立
- (2) 学習に取り組む集団の組織化
- (3) 教材研究と集団思考の組織化¹⁾

実践を進めるに当たって、(1)については、どの教科、活動にも共通するものがあるが、(2)と(3)については、教科の特性上、不可分であり、それぞれ固有の方策が必要であると考え。論を進める上で、(2)、(3)に分けるが、本稿では、国語科、文学教材に取り組む学習集団づくりについて述べる。

(1) 全員参加の学習規律の確立

4月当初から、授業時刻が過ぎててもなかなか全員がそろわない。やっとそろっても、奇声を発する子ども、よそ事をする子ども、私語をする子ども、立ち歩く子ども、けんかを始める子どもなどで授業が成立しない。宿題をしてこない子どもも多かった。学級集団として高めるべく、班を組織し、仲間づくりに取り組んだ。しかし、授業は仲間づくりを待ってはくれない。毎日が戦いであった。こんな子たちだから無理なものと、進歩、成長を諦めたら負けである。

基礎としての学級集団づくりを進める上で、まず生活班を組織した。男女混合の6~8人が適当と考える。生活班では、みんなで力を合わせて、学級をよくするためにどんなことをしたらいいか考え自治的に取り組むことを目標とした。それを、「先生にさせられる」のではなく、子どもたち自身のやりたいことになるよう進めないと生き方にはつながらない。そこで、お誕生会や、目標達成ができたときのお楽しみ会など、子どもたちにとって楽しい計画を立てた。また、自然発生的な遊びを取り上げ、組織的に行った。その際に、ルールを明確にし、守ることによってゲームが盛り上がり、より楽しいことを体感させる。規律が外から縛られると感じるものでなく、自分たちの学習を深めるのに役立つ、必要なルールであるという認識の土壌をつくる。

学習集団として育てる第一歩は、まず、「チャイムが鳴ったら席に着く」ことから始めた。毎時間やるのは大変なので、少し長い休憩時間後の3時間目に行った。時計を見ていると、なんと全員そろうのに10分かかる。私が「遅い」と言うと、子どもたちは「運動場の端まで行ってるからそれくらいかかる」と返してくる。頭ごなしに「もっと早く帰ってきなさい」とは言わずに、「じゃ、一度計ってみましょう」と、運動場の一番遠い所から戻ってくるのにかかる時間をストップウォッチで計った。「チャイムが鳴り始めたらすぐ走って戻ってくる」と指示。「鳴り始めたら」というのがポイントである。鳴り始めが授業の開始時刻になっているからだ。図って

みると、1分半で帰ってくる。早く帰ってきた子どもたちは意気揚々、1分半にしようと言う。しかし、私は、「全力疾走で戻るのはしんどい。ちょっとゆっくり戻りたいときもあるかもしれない。少しは余裕も必要」と説明し、鳴り始めてから3分以内とした。これは、個人競争ではなく、班競争にすると効果が大きい。一緒にがんばろうという仲間がいること、チームで競争ということになると、どの子も俄然張り切る。

だからといって、すぐできるようになるわけではないのだが、こうして、まず、「学習の開始時刻を守る」という規律を身につけさせた。子どもたちに規律を守るように言うからには、教師もチャイムの合図を守ることが大事である。特別なことがない限り、チャイムの合図ですぐに授業を終わるようにした。

班長に指示を出し、班長はそれをみんなに伝える。それをもって、班を評価する。「○班、静かに集中しているね」「△班、全員そろったね」等の評価によって、他の班も見習おうとする。そして、班長の言うことに耳を傾けるようになる。

しかし、そこでいざこざが起こったり、奇声やほか事、雑談などがなかなかなくなる。授業を中断して、話し合いをせざるを得なかったり、帰りの会は毎日のように反省会だったりした。集団遊びや歌の振り付け、日記を一枚文集にしていと思うところを伝え合うなどさまざまな取り組みをした。その結果、少しずつ仲間としての意識が芽生えた。

(2) 学習に取り組む集団の組織化

文学作品に取り組む学習班は、子どもたちの発言の機会や話し合う基盤となることを考え、生活班を2つに分け3~4人にするのがいいと考えてきた。話し合うとき、2人では第3者が必要な場合に困ること、5人では全員が発言するには時間がかかりすぎることから、3人か4人くらいが適当と考える。

学習班(小集団)のよさは、

- ①子どもたちが、生活経験や本音を出しやすく、学習においても多様な考えを出しやすい。
 - ②子どもたちどうし、意見交流、援助や批判がしやすい。
 - ③子どもたち自身で学習への要求や協同的な学習規律を創り出すことができる。
 - ④子どもたちどうしが小集団内で相互援助し、全員発言、全員参加に意欲的になる。
- 等、挙げられる。

学習班では、話し合いを進める司会者が重要な役割を果たすことになるので、最初は指導に責任を持つ教師として指名してもよいと考える。その時間の学習のねらいによって、授業の前に司会者(リーダー)を集めて、「全員の意見を聞くこと」「出た意見はまとめないですべ

て出すこと」等、指示をしておく。意見の出ない子どもへの対応なども、状況に応じて指導しておく。

ふざける子ども、よそ見、手慰みなどをする子ども、話を聞かない子どもなどさまざまで、集中は難しい。全員参加の授業をつくるためには、まず「聞く」姿勢を身につけさせる必要がある。教師が、集中しない子どもに、注意をすると、そのたびに授業が中断し、他の子どもにも叱責の声を聞かせてしまう。それよりは、小集団を組織し、ほめ励まして指導する方が効果的である。「○班は、全員が学習準備できているね!」「△班は全員静かに聴く姿勢ができていますね!」など、一番よい班をほめる。すると、他の班も見習おうとするので、その姿勢をほめる。ゲームなども取り入れ集中する姿勢を育てる。子どもたちは少しずつ、助け合うことや注意し合うことを身につけ学習班として育ってくる。全員ができるようになる。それが普通になっていく。

このように、学習班として基本的なことを身につけ、主体的に学習に取り組む姿勢の育成を図る。そのためには教材研究と発問の研究が必要となる。何をこそ考えさせ深めるのか、子どもたちに何をつかませ、それによってどんな成長をめざすのか、ということを確認にして授業を組み立て、集団思考を組織することが重要になる。

(3) 教材研究と集団思考の組織化

教科固有の特性に照らし、教材研究を深めて子どもたちに身につけさせるべき内容を明確にした上で、授業を創造していかなければならない。

文学教材に取り組む学習集団づくりに関して、まず「物語の力」についてふれておきたい。

◇物語の力

多くの子どもたちは、「お話」が好きである。教科書をもらうと、読めない漢字があっても、とにかく物語文は読む。子どもたちを惹きつける魅力を持っている。それはなぜか。

文学作品は、人間の生き方や人間そのもの、人間関係が、一つの完結をもって描かれている。優れた作品は、その本質にふれたとき、私たちの心を打ち、考えさせ、発見させ、自分の生き方にもかかわるような影響を与える。また、日常生活を越えた未知の世界の経験を、ドキドキ、ワクワクと味わわせてくれるからではないだろうか。

このような作品を授業で扱う意義は何か。

感動する話に出会ったとき、私たちはそれをだれかに伝えたいと思い、話をするのではないだろうか。話を聞いた人が同じ経験をしていて意気投合することもあるだろう。また、自分より深い思いや異なる感想が返ってきて、自分の考えがさらに深まることもあるだろう。優れた作品は、読み手の心を打ち、揺るがし、その共有によって読み手どうしをつなぐ。

授業は、そうした話し合いを意図的に広げ深めるよう組織することによって、人間や社会、自然についての認識を豊かなものにし、同時に「コミュニケーション能力」「知的活動」「感性・情緒等」の基盤を培うと考えられる。

一読しただけではつかみきれないことや、考え合うのに適した課題などが織り込まれている作品は、授業の中でこそそれらを発見できる。

子どもたちは物語の展開や登場人物の言動、心情にふれる中で、自分を重ねて読む。自分の内に思い浮かぶことや生まれてくる気持ちを見つめ、自己を発見する。また、他者の思いや考えを聞き、理解を深める。それらを共有することによって仲間とつながっていくような授業づくりが必要ではないかと考えてきた。私自身は教育現場を卒業したが、今後も機会がある度に先生方に伝えていきたいと考える。

物語には子どもを育てる力があると感じてきた。

学級崩壊状態の3年生で、「つりばしわたれ」(長崎源之介)の授業をしたときのことだった。「紺の着物の男の子はだれだったのだろう」という発問をした。それまで、奇声や雑談が飛び交う教室であったのが、このとき、「カッコウや」「山彦や」「だれか村の子や」など、おもしろ半分ながらも、全員が集中した。「どこからそう思うの?」と投げかけた。学習班で根拠を考えさせると、「カッコウが飛んでいたときだったから」「トッコが山彦で遊んでいたときだったから」「山彦はまねして繰り返すから」「村の子どもは3人だけじゃないから」などの意見が出された。なるほどと、子どもたちを見直し、崩壊からの脱出に希望が持てた授業であった。そして、物語の持つ力を改めて認識した。

◇めざす授業像

子どもたちの考えをより深めたり、ものの見方や考え方、感じ方を豊かにしたりするためには、指導者の教材研究が重要である。いろいろな視点から教材を解釈し分析することによって、一人一人の子どもの読みを大切にしながら、教材の本質や子どもの真実に迫ることが可能になると考える。

そのためには、多様な考えをもとに、対立する考えや矛盾を明らかにして集団思考を組織することが必要である。課題解決に向かって、このことからこうではないだろうか、いや、この言葉からはこうだろうと根拠を挙げながらねばり強く追究する学習集団に育てたい。それによって、

- 子どもたちどうしが、互いの考えをかかわらせて話し合い「新しい考え」をつくり上げる、達成感を味わえる授業。
- ものの見方や考え方、感じ方、生き方などを学び、ひとりひとりが成長する授業。
- 子どもたちどうしが、自分の考えを出し合うことにより互いの新たな面を発見し合い、つながりを深める授業。

以上のような授業の創造をめざした。

書いてあることは、読めば理解はできる。しかし、心に響く理解のためには、感性をくぐらせることや体験が必要となる。それらが出される時、共感する仲間がいることが大事である。聞いてくれる仲間がいてこそ話し手は本音で語れるのである。

これまで多くの授業研究に参加する機会があった。子どもたちが真剣に授業に集中する姿や子どもを惹きつけるすばらしい授業者に出会った。そして考えたことは、「子どもたちが先生に向かって答えを言う」授業から「子どもたちどうしが考えを出し合い話し合う」授業、全員参加の授業へと質的転換を図ることの重要性である。それにより子どもの力を引き出し伸ばし、豊かに成長させることができると考える。

3. 全員参加の授業をめざして

どの子どもも気兼ねなく自分の思いや考えを出せる全員参加の授業をめざし、次のように進めてきた。

第一段階

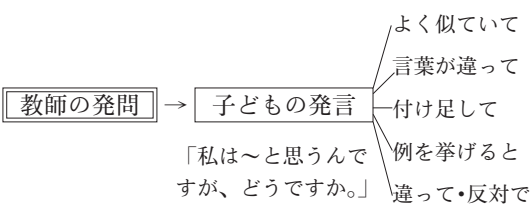
全員が授業に集中している。

- まず話を集中して聞く姿勢を身につけさせる。
- 聞かせる工夫も必要
- わからないことをそのままにしない。
- 先生に向かってではなくみんなに話す意識を。

話し手はみんなの方を向いて発言する。
聞き手は話し手を注目し頷きながら聞く。

第二段階

相手意識を「先生」から「みんな」へ。



- 一人ひとりが自分の考えを持ち、全員が発言する。
- ペアやグループで考えを出し合う。
(出た考えは、まとめないですべて出させる。)

第三段階

課題を明確にし、集団思考を通して解決に迫る。

- 多様な考えを出し合い、それからの違いを明確にしてみんなで考え合い、真理真実に迫る。
- 全員のものになるよう小集団を活用する。
わからないことはわからないと言える。
疑問は納得のいくまで話し合える。
間違いを大切にする。
反対意見や違う考えが出せる。

4. おわりに

前述の3年生はその後にも転入生が多く、4年時にも編制替えをし、2学期には44人という多人数だった。そうした状況にあって、学習集団づくりは不可欠であった。

「ごんぎつね」の授業の中で、ごんと同じように誤解を受けた子どもが悔しく悲しかった思いを表出し、それに触発されて、我も我もと自分のつらかった話が出てきたりした。また、学級内でなかなかみんなとなじまず荒れが心配された子どもが、他の多くの子どもの「ごんは満足して死んでいったらろう」という考えに対し、ひとり、「ごんは死にたくなかったらろう」と自分を重ねた発言をしたりした。

「学習集団」と言うとき、取り組む教科について、教材研究を深めることは不可分である。それによって、学習集団として高めることが可能になる。その中で、一人一人の子どもが自らを豊かにし、同時に、互いに理解を深め合い仲間として育っていく。

話し合いが深まり、教師の教材研究を越える結論が出たこともあった。それは、回数こそ少ないが、子どもたちにとっても、教師にとっても達成感や充実感を味わえた授業だった。

今後も、学習集団としてどう高めるか、さまざまな道筋を明らかにし、教育実践を進める先生方の役に立つものにしたいと考える。

〈参考・引用文献〉

- 1) ひとりひとりを生かし考え合う学習集団づくり
— 全員参加による文学の授業をめざして — 名張市立つつじが丘小学校研究紀要 15-20 1983
- 2) 現代／学習集団づくり入門《発問》現代学級経営研究会・編 東方出版 1971 初版
- 3) 学習集団をどう育てるか 愛生研学習集団研究部編著 明治図書 1983